

令和2年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト 2020（全国的な祭典の実施事業）
特別支援学校「みんなが主役」きらめき事業
成果報告書



令和3年3月
徳島県教育委員会

本報告書は、スポーツ庁の Special プロジェクト 2020 委託事業として、徳島県が実施した令和 2 年度 Special プロジェクト 2020 (Special プロジェクト 2020 全国的な祭典の実施事業) の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

はじめに

東京パラリンピック競技大会が目前に迫る中、さまざまなパラスポーツが各地で盛んに取り組まれ、メディアにとりあげられるようになりました。障がい者スポーツの裾野を広げていくために、障がいのある方がスポーツを楽しめる環境の整備が大変重要になっています。

また、オリンピック・パラリンピックは、スポーツの祭典であるとともに文化の祭典でもあり、各地で文化プログラムが開催されるなど、気運の醸成が図られており、障がいのある人の芸術・文化活動が一層推進されているところです。

こうした中、平成 29 年度より 3 年間取り組んできた Special プロジェクト 2020 体制整備事業での成果を生かしつつ、さらなる活動の充実と子どもたちが活躍できる場や機会の創設を目指し、今年度は新たに Special プロジェクト 2020 全国的な祭典の実施事業に取り組みました。

具体的には、スポーツ分野において、コロナ禍における各種大会やイベントが中止される中、オンラインを活用した競技「ターゲットボッチャ」を考案し、新しい形でのスポーツ交流やスポーツ大会を開催いたしました。また、重度障がい者も楽しめる「ボッチャ」を各特別支援学校で実施し、ボッチャをとおした交流及び共同学習を推進するとともに、カローリング等のニュースポーツにも取り組み、広く地域との交流を深めるための活動を継続して展開いたしました。さらに、徳島視覚支援学校では、東京パラリンピックの自転車競技にも採用された「タンデム自転車」の乗車体験会を開催し、徳島聴覚支援学校では、卓球部の活動におけるスキルアップを図るなど、それぞれの特別支援学校のニーズに応じたスポーツ振興を図りました。

また、芸術・文化活動においては、専門家との連携による新たな技術を取り入れたデジタルアート作品づくりや地域との交流による共同制作作品づくりにも取り組み、その成果については、スーパーマーケットと連携した「地域での作品展」へ展示や、世界遺産登録を目指している「四国遍路」の県内霊場札所における、特別支援学校の生徒によるお接待活動の中での小物作品の配布や展示をとおして、障がい者アートの発信を行ってきました。

さらに、例年開催している県内全ての特別支援学校のアート作品が集結する「特別支援学校きらめきアート展」を、今年度はコロナ禍に対応した WEB 開催とするとともに、隣接する他県へ参加を呼びかけることで四国規模のアート展へと拡充を図りました。

事業の実施にあたり、県内の全ての特別支援学校の協力を得て活動に取り組むとともに、徳島県障がい者スポーツ協会、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、芸術専門家、経済関係者、教育関係有識者、県ダイバーシティ推進課等の参画により実行委員会を組織し、活動内容の検討を行いました。

本報告書は、上記内容を実践した成果を検証するために、作成したものです。多くの方々に御覧いただき、忌憚のない御意見、御助言を賜れば幸いです。

最後になりますが、本事業の実践にあたり、御指導、御協力をいただいた、関係機関の方々や各特別支援学校の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

令和 3 年 3 月

令和2年度 Specialプロジェクト2020（全国的な祭典の実施事業）
特別支援学校「みんなが主役」きらめき事業
成果報告書（目次）

Specialプロジェクト2020（全国的な祭典の実施事業）
特別支援学校「みんなが主役」きらめき事業

1	事業の目的・概要	2
2	県立特別支援学校の概況	3
I 実行委員会		
1	実行委員会概要	5
2	検討状況	
(1)	第1回実行委員会	6
(2)	第2回実行委員会	7
(3)	第3回実行委員会	8
II 活動報告		
1	スポーツ活動	
(1)	コロナに負けるな！リモート de スポーツ大会	10
(2)	とくしまスポーツ交流大会	10
(3)	体育・スポーツ指導者養成 伝達講習	11
(4)	特別支援学校におけるボッチャの実践	11
(5)	視覚障がいのある児童生徒，聴覚障がいのある児童生徒の スポーツ活動の振興	15
(6)	ニュースポーツをとおした地域との交流	16
2	芸術・文化活動	
(1)	専門家との連携とアート作品制作	17
(2)	作品制作をとおした地域との交流	21
(3)	地域におけるアート展の開催	22
(4)	四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動における作品の展示 と配布	25
(5)	アート展の開催	27
3	活動の成果と課題	31

Special プロジェクト 2020

(全国的な祭典の実施事業)

特別支援学校「みんなが主役」きらめき事業

1 事業の目的・概要

本県において2017年度から実施しているSpecialプロジェクト2020体制整備事業により培ってきたネットワークを活用して、特別支援学校が地域の障がい者のスポーツ活動や芸術・文化活動の拠点となった広域な祭典を実施することを目的とし、本事業を推進する。

そのため、スポーツ活動においては、特別支援学校の生徒をはじめ地域住民や徳島県に隣接する他県も参加できる、障がい者スポーツやニュースポーツを取り入れたスポーツ大会等の祭典を開催する。また、各特別支援学校においては、地域と密着したポッチャ交流会やニュースポーツ交流会を継続して実施する。さらに、国立特別支援教育総合研究所が実施する「特別支援学校『体育・スポーツ』実践指導者協議会」への派遣及び伝達講習を通して、特別支援学校を拠点とした障がい者の体育・スポーツ活動の充実を図る。

芸術・文化活動においては、専門家等との連携による新たな技術を取り入れた作品制作による児童生徒の芸術的才能の開花を推進するとともに、地域の文化遺産である四国霊場札所での作品展示を含めた「児童生徒のアート作品展」を開催し、障がい者の芸術・文化活動に対する理解啓発を図る。

なお、本事業の実施にあたっては、定期的な実行委員会の開催により評価と改善を行うとともに、コロナ禍における祭典の開催方法について検討する。

Special プロジェクト 2020

～障害の有無にかかわらず、すべての人が笑顔になる祭典～

趣旨等

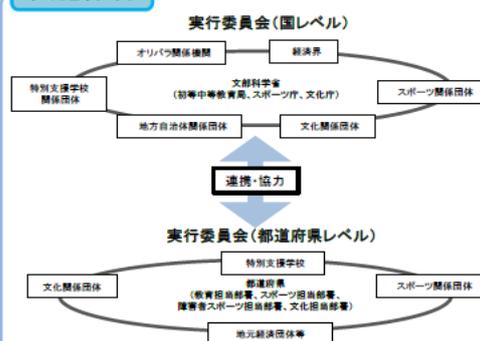
●2020年からの新たな特別支援教育(学習指導要領改訂)を契機に、**全国の特別支援学校で、スポーツ・文化・教育活動の全国的な祭典を開催**

- ・「ほんもの」のスポーツ・芸術に触れ感動を共有する機会
- ・障害の有無等を超えて誰もが心に触れ合う機会
- ・地域住民の主体的な参画

事業内容

- ①祭典の企画立案等**
国レベルの中央実行委員会を開催し、事業内容を具体化するとともに、関係機関とのネットワークを構築し、ロゴマーク作成やプロモーション等を行う。
- ②各地での祭典開催のための体制整備及び情報収集**
各都道府県・地域において地域実行委員会を開催し、域内の関係機関のネットワークを構築するとともに、特別支援学校で行われる運動会、文化祭に関する情報収集を行う。
- ③祭典に向けたモデル事業の実施**
全国的な祭典の開催に向けた具体的な取組の先進事例を蓄積するため、モデル事業を実施する。
- ④特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業の実施**
特別支援学校等における体育・運動部活動等を充実するとともに、特別支援学校等を拠点とした障害者の地域スポーツクラブの設立を支援する。
- ⑤特別支援学校を対象とした全国的なスポーツ・文化大会の開催支援**
全国の特別支援学校のスポーツ・文化活動の充実を図るため、特別支援学校のスポーツ・文化活動の成果を披露するための全国大会の開催を支援する。

実施体制



効果

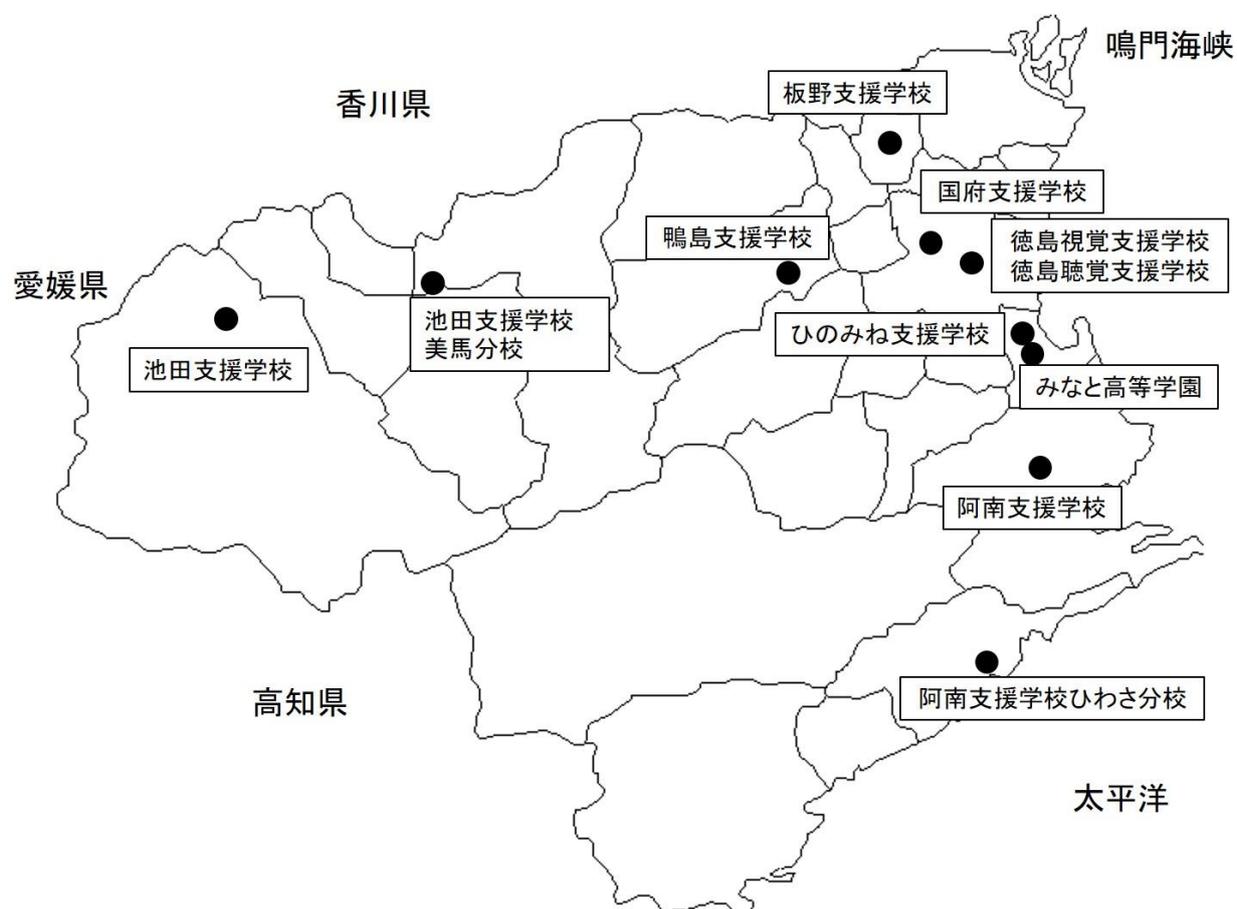
- ・地域の誰にでも開かれた次世代の「共生学校」を創造
- ・東京大会のレガシーとして、障害の有無や年齢・性別を超えた、地域の共生社会の拠点づくり

2 県立特別支援学校の概況

徳島県内には、県立の特別支援学校が 11 校設置されており、概要は次のとおりである。

(R2. 5. 1 現在)

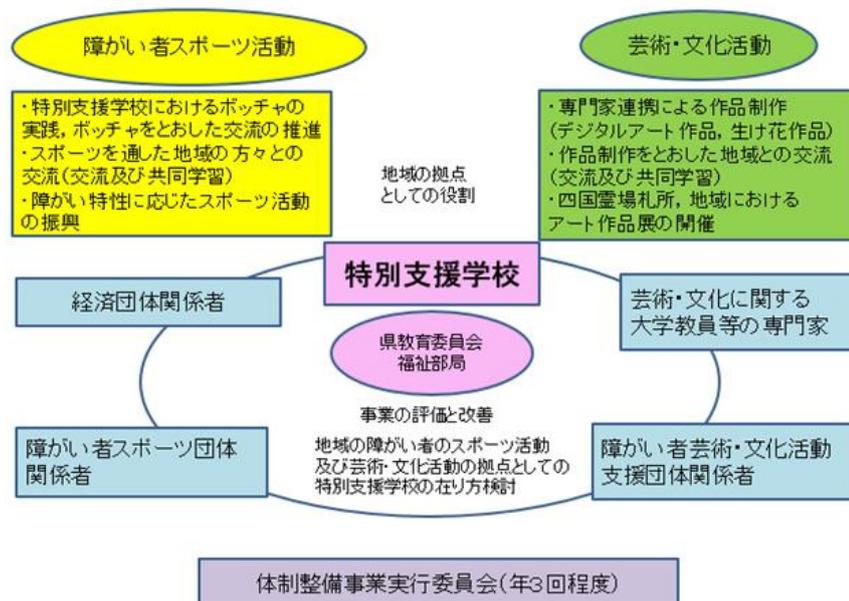
	学校名	所在地	学部 生徒数	障がい種
1	徳島視覚支援学校	徳島市南二軒屋町	幼小中高 21 名	視覚障がい
2	徳島聴覚支援学校	徳島市南二軒屋町	幼小中高 41 名	聴覚障がい
3	板野支援学校	板野郡板野町	小中高 186 名	肢体不自由, 病弱, 知的障がい
4	国府支援学校	徳島市国府町	小中高 278 名	知的障がい
5	鴨島支援学校	吉野川市鴨島町	小中高 22 名	肢体不自由, 病弱
6	ひのみね支援学校	小松島市中田町	小中高 55 名	肢体不自由
7	阿南支援学校	阿南市上大野町	小中高 115 名	知的障がい
8	阿南支援学校ひわさ分校	海部郡美波町	小中高 11 名	知的障がい
9	池田支援学校	三好市池田町	小中高 87 名	知的障がい
10	池田支援学校美馬分校	美馬市美馬町	高 33 名	知的障がい
11	みなと高等学園	小松島市中田町	高 86 名	知的障がい, 病弱



I 実行委員会

1 実行委員会概要

(1) 事業実施体制



(2) 委員会の目的

スポーツ庁の委託事業「Special プロジェクト 2020」全国的な祭典の実施事業を実施するにあたり、特別支援学校「みんなが主役」きらめき事業（Special プロジェクト 2020 全国的な祭典の実施事業）実行委員会を設置し、特別支援学校が地域の障がい者の芸術・文化活動及びスポーツ活動の拠点となり、開催する祭典の在り方について検討するとともに、本事業の評価を行う。

(3) 検討事項

- ・徳島県内のスポーツ・文化関係者（行政、学校、スポーツ団体、文化団体、経済団体、有識者等）から構成し、徳島県内の関係機関のネットワークを構築する。
- ・地域の障がい者スポーツ活動及び芸術・文化活動の拠点としての特別支援学校の在り方について検討する。
- ・開催する祭典の企画や運営とその評価、今後の展開について検討する。

(4) 委員名簿（敬称略）

区分	所属・職名	氏名	備考
学識経験者	徳島文理大学人間生活学部 児童学科 准教授	富樫 敏彦	委員長
芸術専門家	四国大学生生活科学部人間生活科学科 デザインコース 准教授	上野 昇	
スポーツ	徳島県障がい者スポーツ協会 次長	篠原 崇	
芸術団体	徳島県障がい者芸術・文化活動支援 センター 総括専門企画員	西木 正	
経済団体	株式会社キョーエイ 人事部長	富田 圭司	
行政	徳島県ダイバーシティ推進課 課長	大岡 士郎	
	徳島県教育委員会特別支援教育課 課長	猪子 秀太郎	

2 検討状況

(1) 第1回実行委員会

- ア 日時 令和2年8月31日(月) 15:15~16:15
イ 場所 徳島県庁 804 会議室
ウ 出席委員 7名
エ 概要 委員長選任,
事務局による事業の概要説明,
意見交換



オ 委員からの主な意見等

(ア) 全体として

- ・ 特別支援学校の児童生徒のスポーツ活動及び芸術・文化活動の充実を図ることは、障がい者の生涯スポーツ、芸術・文化の振興につながる。
- ・ 教育委員会と知事部局が連携して取り組むことができれば「徳島モデル」になる。

(イ) スポーツ活動

- ・ 今年度も障がい者スポーツセンターとして、道具の貸し出し、ボッチャの審判等において協力ができる。
- ・ コロナ禍のためボッチャ交流会が中止となったことは残念である。今後、スポーツ活動をオンラインで実施することはできないか。こういう時代なので、オンラインは大きな武器である。
- ・ 実際にルールを工夫して、レクリエーションという形であればボッチャをオンラインでできた。競技は限られるがフライングディスクも工夫すればできると思う。
- ・ 地域の方との交流という点も大切だが、卒業後もスポーツ活動に参加してほしいと考えている。全国障害者スポーツ大会を見据えて競技・種目を選ぶといった視点を持つておくことが必要である。

(ウ) 芸術・文化活動

- ・ コロナ禍において学校へ外部の者が入ることになるため、十分感染対策を講じながら実施していきたい。
- ・ 地域におけるアート展について、店舗数や展示スペースの拡大といった部分で協力していきたいと考えている。
- ・ 個人では作れないものを大学等の専門家と連携し、学校としての共同作品を作ってみてはどうか。
- ・ 昨年度から考えていたことだが、「きらめきアート展」が1回限りの開催であることは、惜しい。いくつかの作品を店舗に巡回展示できればよいと思う。
- ・ 作品展については、映像作品を流してもらうのもよいと思う。実際に映像を流している店舗もあるので、データがあれば可能である。
- ・ 美馬分校において「出張陶芸講座」を実施し、箸置きを作成してお遍路さんへ配布する予定であったがコロナの影響で中止となってしまった。また、別の形で実施したいと考えている。

(2) 第2回実行委員会

ア 日時	令和2年12月2日(水) 15:00~16:00
イ 場所	徳島県庁 教育委員室
ウ 出席委員	富樫委員長ほか5名
エ 概要	事務局による事業の進捗状況説明, 意見交換



オ 委員からの主な意見等

(ア)全体として

- ・ コロナ禍の厳しい状況の中、様々な工夫を行いながら取組を継続できていることに感心する。
- ・ リモートを活用したスポーツ活動も作品展もはじめての取組ばかりである。我々も参考としたい部分があるため、いろいろと情報提供いただきたい。

(イ)スポーツ活動

- ・ リモートで行う「ターゲットボッチャ」について、いい取組だと思う。今後は県外と結んで実施することも視野に入れているとのことなので、その可能性に期待したい。
- ・ 障がい者スポーツ協会においても、オンラインを活用した各施設での取組を行っているが、ここまでの「交流」という取組は実施できていない。非常に興味のある取組であり、今後の取組の参考としたい。
- ・ 「ターゲットボッチャ」の大会については、委員もアクセスして観戦させてほしい。
- ・ フライングディスクなどリモートで実施できるスポーツ活動を障がい者スポーツ協会でも探しているところである。リモートで実施する場合には、相手側が用具を準備できる必要があるため、どうしても実施可能な競技は限られてしまう。

(ウ)芸術・文化活動

- ・ これまでの「きらめきアート展」をWEBでの開催として、「四国アート展」へと広げることが、非常に良い取組であると思う。これまで気づかなかった他県の芸術性に気づくきっかけとなって、子どもたちも創作意欲がわいてくる可能性がある。
- ・ 「きらめきアート展」をWEBでの開催とすることは、コロナ禍でのチャレンジである。うまくいけば来年度以降も実会場とともにWEB開催もするとよい。
- ・ 「地域での作品展」については、新たな取組ではないがコロナの関係で中止にしてしまうと、これまでの歩みが止まってしまう可能性があるため、引き続き継続していくことに意味があると思う。
- ・ デジタルアートについては、徳島聴覚支援学校でVRゴーグルとiPadを用いたVRアートに取り組んでいる。離れた場所でも共同作品ができるというアートを目指していきたい。また、板野支援学校では県内特別支援学校で初めて「卓上プロジェクションマッピング」に取り組んでいる。
- ・ 「作品制作をおとした交流活動」と聞くと両校が集まって一緒に作るというイメージがあるが、作品のやり取りを繰り返しながら仕上げていくといった方法は初めて知った。よく考えられた新しい形での交流活動であると感じる。

(3) 第3回実行委員会

- ア 日時 令和3年3月3日(水) 15:00~16:30
イ 場所 徳島県職員会館 2階 視聴覚室
ウ 出席委員 富樫委員長ほか6名
エ 概要 今年度取組の報告及び最終評価,
今後の取組について



オ 委員からの主な意見等

(ア) スポーツ活動

- ・ 障がい者スポーツセンターでも1月に施設2ヶ所をオンラインでつないで「ターゲットボッチャ」を実施したが難しかった。機器関係に課題を感じた。
- ・ 「ターゲットボッチャ」を当日拝見したが、非常によい取組であった。今のままだもよいと思うが、柔軟にルールを変更することでさらに楽しめる工夫の余地がある。
- ・ ターゲットボッチャの一番の魅力は、リアルに一緒の場所にいなくてもできること。コロナ禍でなくても継続して実施していくとよい。

(イ) 芸術・文化活動

- ・ 「VRアート」や「卓上プロジェクションマッピング」など、新たな取組に挑戦できたことがよかった。
- ・ 店舗での作品展は、平成29年度の1店舗から始まり、現在5店舗まで広げることができた。ある店舗からは「普段あまりこの店舗を利用しない保護者が見に来てくださった」との報告があり、商売している民間企業としてはそれが一番嬉しい。いろいろな方に来ていただいて、そこでコミュニティが広がっていけば大変嬉しく思う。
- ・ WEB開催での「きらめきアート展」のアクセス数に驚いた。今後は実会場とWEB会場の2本立てで開催することがスタンダードになっていくという印象を持った。子どもたちが発表できる機会があることは大事である。

(ウ) 今後の活動について

- ・ 子どもは褒められて成長していくところがあるため、子どもたちが活躍できる場や機会をさらに作っていかなくてはいけない。
- ・ 来年度の全国障害者スポーツ大会三重大会からボッチャも正式種目となり、予選会も開催する予定となっている。特別支援学校だけのボッチャ大会でも何か協力させていただきたい。また、パラリンピックの開催年度なので、特別支援学校で、ボッチャの正式なルールを周知していただけると大変ありがたい。
- ・ 大学でも授業が遠隔になり、その中で遠隔のよさがよく分かり、対面授業との両方を取り入れるハイブリッド式が推奨されている。スポーツ活動、芸術・文化活動においてもハイブリッドによる四国をワンパックにした広域での取組が可能であると考える。
- ・ 現在は、スポーツ活動と芸術・文化活動が分かれているが、一緒に何かできないかということを考えている。例えば、「ターゲットボッチャ」で使用しているターゲットマットについては規格を合わせておき、アートでそれぞれに彩るということにチャレンジしてみてもよいと思う。「スポーツとアートの融合」ということでアイデアを出して具現化できれば、東京オリンピック・パラリンピックが開催される年にふさわしい取組となる。

II 活動報告

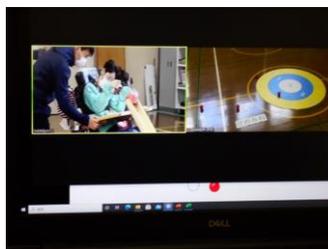
1 スポーツ活動

(1) コロナに負けるな！リモート de スポーツ大会

ア ねらい	「With コロナ」時代におけるスポーツ大会の新たな実施方法を実現するとともに、スポーツ活動をとおした交流を促進する。
イ 日 時	令和2年12月3日（木） 10:30～11:20
ウ 場 所	各特別支援学校（アプリ「Zoom」を使用して各会場を中継）
エ 参加者	肢体不自由特別支援学校3校 生徒19名
オ 内 容	「ターゲットボッチャ」（ボッチャの用具を使用した独自ルールの得点競技）を実施した。総当たりリーグ戦で勝敗を競い合い、成績に応じた賞状の授与を行った。

「ターゲットボッチャ」のルール

- ①各チーム6名を選出し、6球投げる。
(6名以下のチームは、一人が複数回投げる。)
- ②6投球後に、それぞれの球が止まっているエリアの得点を確認し、合計点の多いチームを勝者とする。
- ③同点の場合は、高得点（3点）のエリアにある球数の多いチームを勝者とする。
- ④③でも同点の場合は、的の中心から最も近い球までの距離が短いチームを勝者とする。



- カ 成果等 様々な大会や交流学習が中止となる中、オンラインを活用することによって、スポーツ交流の機会を設けることができた。スクリーンに映し出す画面構成を工夫することで、対戦相手への意識の高まりやスムーズな運営につながった。参加者からは「楽しかった」「今後もこのような機会を設けてほしい」との意見が聞かれた。
- また、参加校以外の特別支援学校及び本事業の実行委員へ開催案内をしておくことで、当日は、自由に観戦や応援ができるようにした点についても高評価を得た。

(2) とくしまスポーツ交流大会

ア ねらい	バスケットボールやニュースポーツ活動を取り入れたスポーツの祭典を開催し、各学校間及び地域住民等との交流を深める。また、オンラインを活用した「With コロナ」時代における新たなスポーツ大会の実現を図る。
イ 日 時	令和3年1月27日（水） 10:45～14:15
ウ 場 所	うだつアリーナ（美馬市脇町新町196） 各特別支援学校（アプリ Zoom で各会場を中継）

- エ 参加者 県内外の特別支援学校7校 10チーム 生徒81名
 オ 内容 実会場におけるバスケットボール競技及びオンラインで各会場を中継しての「ターゲットボッチャ」を実施した。



- カ 成果等 卒業学年の生徒から「大会を開催してくださり、ありがとうございました」と感謝が述べられるなど、これまで練習してきた成果を発揮し、思い出に残る貴重な大会とすることができた。
- また、オンライン開催の「ターゲットボッチャ」では、県外参加もあって広域開催が実現した。はじめて体験した参加者からは、「こんなやり方ができることに驚いた」、「楽しかった」、「また参加したい」など、好意的な意見が聞かれた。
- 今後は、運営面の改善やオンラインで実施可能なスポーツ活動についての検討を行い、取組の充実と拡大を図りたい。

(3) 体育・スポーツ指導者養成 伝達講習

- ア ねらい 特別支援学校でのスポーツ活動の充実をめざし、ボッチャ等の障がい者スポーツの普及・促進を図る。
- イ 日時 令和3年2月22日(月) 16:00~16:45
- ウ 場所 各特別支援学校 (Zoomを活用したオンライン研修)
- エ 参加者 8名 (特別支援学校教員)
- オ 内容 (ア)伝達講習 (研修報告)

国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校『体育・スポーツ』実践指導者協議会」に参加した教員が、「障がい者スポーツの理解」や「授業の工夫や生涯スポーツへの移行」、「アダプテッド・スポーツ」について説明及び報告を行った。

(イ)「ターゲットボッチャ」の取組 (実践報告)

コロナ禍におけるオンラインを活用した本県独自の新たなスポーツ活動である「ターゲットボッチャ」の実践事例を報告するとともに、競技のルール説明とデモンストレーションを行った。

参加者からは、「ルールがシンプルで分かりやすい」、「思っていた以上に白熱し、楽しかった」、「今後、取り組んでみたい」等の意見が聞かれた。

競技内容や機器操作についての理解が深まったことから、次年度以降の各校における積極的な取組が期待できる。

(4) 特別支援学校におけるボッチャの実践

- ア ねらい 各特別支援学校におけるボッチャの普及及び取組の促進を図る。
- イ 実践内容

(ア) 学校での実践

< 聴覚障がいの学校における実践 >

徳島聴覚支援学校（7月実施，対象：高等部生徒2名）

高等部の体育の授業で実施した。簡単なルール確認の後，すぐに試合をすることができた。少人数での取組であったため，投げる回数も多く，競技を楽しむことができた。技術の高まりにつれ，戦術・戦略を考えながら取り組むことができるようになった。



< 肢体不自由の学校における実践 >

鴨島支援学校（7月実施，

対象：小・中学部，高等部22名）

運動会中止の代わりに校内4カ所にコートを設置し，校内ボッチャ大会を開催した。ルールの簡素化やランプスの利用など，児童生徒の実態に合うように工夫して取り組んだ。また，オンラインの活用により，在宅生徒も活動に参加できた。



ひのみね支援学校（6月～7月実施，対象：高等部7名）

期間中，継続して体育の授業で取り組んだ。障がいが重度である生徒も参加している充実感を得られるように，今できる力を生かして投球できる仕掛けを工夫している。継続して取り組むことによって，ルールやゲーム進行にも慣れ，一人一人が見通しを持って活動に参加することができた。



< 知的障がいの学校における実践 >

国府支援学校（令和3年2月実施，対象：中学部生徒17名）

体育等の授業で取り組んだ。4チームに分かれ，トーナメント戦を実施した。力加減をうまく調整し，目標の場所を狙ってボールを投げるようになった。また，活動中には，他者のよいところを見つけたり，認め合ったりする姿が見られた。交流及び共同学習においてもボッチャ活動を取り入れている。



阿南支援学校（7月，10月実施，対象：中学部生徒14名）

体育の授業において，特別ルールを用いた簡易版ボッチャとして個人戦や団体戦を行った。ターゲットマットやランプスを活用することにより，目標が定まりにくい生徒やボールを握る力の弱い生徒でも，積極的に活動へ参加し，楽しむこ



とができた。

阿南支援学校ひわさ分校（6月，7月，10月，12月実施，
対象：生徒13名）

6月は新入生歓迎会，7月と10月は全校集会，12月は転入生歓迎会の活動として全学部13名全員で取り組んだ。機会を設け，繰り返し実施することでルールが理解が図られた。ゲーム中は，応援したり，素晴らしい投球には歓声があがったりするなど会場に一体感が生まれた。



池田支援学校（11月末に実施，対象：高等部11名）

体育の授業だけでなく，特別活動や生活単元学習等の授業でも取り組んだ。チームを勝利に導くためにインターネットを活用して投げ方を研究したり，自分なりに戦略を考えてきて実践したりするなど，生徒の主体的な行動が現れてきた。



池田支援学校美馬分校（6月～1月実施，対象：高等部生徒33名）

高等部全学年において体育の授業でボッチャに取り組んだ。6月からコートやルールについての説明，道具の名称等を学習し，ゲームをする人，審判をする人を交替しながら，活動を進めた。1月には校内球技大会を開催し，ボッチャ部門を設けた。全生徒と教員でボッチャに取り組むことができた。



<知的障がい，病弱の学校における実践>

みなと高等学園（12月実施，
対象：高等部生徒16名）

投球の種類，試合の戦略や狙うポイント等について説明を行い，グループに分かれて投球の練習を行った。その後，クラス対応でゲームを行った。実践回数を重ねることでコツを掴み，友だちと相談しながら投げ方や作戦を考え，活動を楽しむことができた。



(イ) 交流及び共同学習における実践

※令和2年度については，多くの学校において新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から交流及び共同学習を中止。

国府支援学校（10月実施，中学校の生徒会との交流）

地域の中学校と，ボッチャ活動をとおした交流及び共同学習を行った。自己紹介の後，ボッチャのルール説明を行い，くじ引きにてチーム編成を行った。その後，各チームに分かれて練習し，ゲームを楽しんだ。

はじめて体験する中学生もいたが、ルールも簡単であり、難しい動きもないため、楽しむことができた。ゲーム中には、相談して順番を決めたり、応援したり、一緒に喜んだりする様子が随所に見られ、互いに交流を深めることができた。



(ウ)成果と課題等

<成果や期待される効果>

①学校での実践

- ・障がいの種類や程度に関わらず、誰もが気軽に活動へ参加できた。
- ・技術の高まりとともに戦術等を考えながら楽しむことができた。
- ・運動が苦手な児童生徒の活動意欲や積極性を高めることができる。
- ・パラリンピック種目であるため地域大会や全国大会への出場を目標として取り組むことができる。
- ・余暇活動の広がりや生涯スポーツへのつながりが期待できる。

②交流及び共同学習における実践

- ・生徒同士が主体的に作戦を立てたり相談したりするなど、競技に取り組む姿が見られた。
- ・投球の順番を決めたり、作戦を考えたりするなどの相談の機会を設けやすく、混成チームにすることで交流を深めやすい。
- ・障がい者スポーツを一緒に行うことをとおして、障がいや支援方法を伝えることができる。
- ・障がい者スポーツやパラリンピック競技の啓発として効果がある。

<課題>

- ・取組を推進していくために、用具や個々の実態に応じた補助具のさらなる整備が必要である。
- ・指導教員の専門性を高めるための研修支援や指導者サポート体制の充実が求められる。
- ・分かりやすくルールを説明できる教材や視覚的な支援ツールの開発が必要である。
- ・児童生徒のモチベーションを高められる各種大会やイベントの開催が求められる。
- ・交流及び共同学習を推進するためには、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を講じた安心・安全な実施方法について検討する必要がある。

<今後のボッチャの活用場面>

- ・障がいの種類や程度に関係なく誰でも参加できるため、授業時間だけでなく学校行事や学部行事等のレクリエーションとして、また、地域住民や福祉施設等との交流活動としても実施が可能である。
- ・コートを常設できれば休み時間の余暇活動としても取り入れることができ、ボッチャにより親しむことができる。

<考察>

平成 29 年度から県内の特別支援学校で取り組み始めたボッチャは、現在、多くの学校で根付くとともに、障がい特性や児童生徒の実態に応

じた工夫や配慮が講じられながら発展的に取組が進められている。これは、ルールが分かりやすく、複雑な技術を必要としない点が特別支援学校の児童生徒に受け入れられたためであると考え。

また、障がいの種類や程度に関わらず、誰もが楽しめるボッチャのよさから、交流及び共同学習における活動として取り入れた学校や、「今年度はコロナ禍によって実施できなかったが今後実施できる」と回答した学校も多く、さらなる取組の拡充と様々な交流の促進が期待できる。

各学校での取組の充実に合わせ、児童生徒が目標を持って主体的に取り組めるようにするためには、大会やイベントを数多く企画・開催する必要があり、その際には、生涯にわたってボッチャを楽しめる環境作りの観点からも関係のクラブやスポーツ団体と連携して取り組むことが重要である。

今後は、ボッチャだけでなく、特別支援学校の児童生徒等のスポーツ活動における才能を引き出し、将来の豊かな生活へと結びつけられるような様々な障がい者スポーツに取り組んでいきたい。

(5) 視覚障がいのある児童生徒、聴覚障がいのある児童生徒のスポーツ活動の振興
ア ねらい 他機関との連携により、スポーツ活動の充実にを図る。

イ 実践内容

(ア) 徳島視覚支援学校 (12月実施, 対象: 小学部及び高等部専攻科の児童生徒3名, 保護者4名, 職員10名)

NPO 法人タンデム自転車 NON ちゃん倶楽部 (愛媛県) を招聘し、東京パラリンピックの自転車競技にも採用された「タンデム自転車」の乗車体験会を開催した。座位保持椅子や車いすタイプのタンデム三輪車、スポーツタイプなど様々な種類のタンデム自転車を体験した。



<成果>

タンデム自転車には、様々なサイズや種類があり、ベルト調整もしやすく工夫されており、安心して乗車することができた。はじめは乗車を嫌がる様子が見られた児童も、風を感じて笑顔になるなど、楽しい時間を過ごした。高等部専攻科生徒は講師と息を合わせ、直線をハイスピードで疾走する爽快感を味わったり、スラロームでカーブに挑戦したりすることができた。

体験した児童生徒や保護者からは「楽しかった」、「スピードが出て気持ちよかった」、「子どもに楽しい経験をさせてあげることができた」など、好評を得た。

<課題>

開催日や会場等の設定を十分検討し、多くの幼児児童生徒が参加・体験できるよう計画する必要がある。次年度以降も継続して実施したい。

(イ) 徳島聴覚支援学校 (11月～2月実施, 対象: 中学部, 高等部6名)

卓球部生徒は、徳島県卓球協会理事長の藤浦哲夫氏より、1ヶ月に1回程度、1時間の専門的な技術指導を定期的を受けた。

<成果>

一人一人の課題を見つけ、生徒が理解できるように指示だけでなく、実演を混じえながら視覚的に分かりやすく解説を加え、基本技術を中心に指導いただいた。専門的な視点からの指導を継続して実施することにより、サーブの打ち方や身体の使い方など、それぞれの生徒において技術的な向上が見られ、生徒からも、「サーブが大切だと分かった」、「足の動かし方に気をつけることができるようになった」等の意見が聞かれた。昨年度から継続して指導いただいたことにより、充実した部活動となった。



<課題>

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、各種大会が中止となり、練習の成果を発揮する機会が失われた。生徒たちの活動モチベーションを高く保つためにも、目標となる大会やイベント等の企画・開催をする必要がある。

(6) ニュースポーツをとおした地域との交流

※令和2年度については、多くの学校において新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から交流及び共同学習を中止。

ア ねらい ニュースポーツをとおして、地域との交流を図る。

イ 実践内容

(ア)阿南支援学校 (11月実施, 中学校との交流)

ボッチャとフライングディスクを行い、ボッチャは3グループに分かれての団体戦とし、フライングディスクは個人戦として、点数を競い合った。どちらの競技においても、互いに応援し合う様子が見られ、よい雰囲気の中で活動することができた。



(イ)池田支援学校 (12月実施, 障がい者支援施設との交流)

近隣の障がい者支援施設の利用者とボッチャの交流試合を行った。15試合程度メンバーを入れ替えながら行った。特にメンバーを固定していなかったが、生徒たちが臨機応変にチームを組んで全員参加することができた。挨拶や参加の態度もよく、和やかな雰囲気の中で交流することができた。



ウ 成果

- ・技術的な差が少なく，誰もが平等にボッチャを楽しむことができた。
- ・投げ方や狙い方を互いに教え合ったりチームメイトを応援したりするなど，自然な関わりが生まれた。
- ・ボッチャ等のニュースポーツを学び，その活動を取り入れたことで，自信を持って交流に参加することができた。
- ・普段はおとなしい生徒が試合で活躍し，周囲から称賛されて嬉しそうな表情を見せるなど，授業とは違った一面を見ることができた。

エ 考察

誰もが楽しめ，参加しやすい活動を取り入れることにより，活動の機会や参加者が増え，交流の推進が図られると考える。必要な用具の整備や柔軟なルール設定等の課題はあるものの，卒業後も生涯を通じてスポーツ活動を楽しむことができるようにニュースポーツやアダプテッド・スポーツについても特別支援学校へ積極的に取り入れていきたい。

2 芸術・文化活動

(1) 専門家との連携とアート作品制作

- ア ねらい 外部専門家との連携によるデジタルアート等の作品制作をとおして児童生徒の芸術的才能の開花を促す。
- イ 実施校 徳島聴覚支援学校，板野支援学校，ひのみね支援学校，みなと高等学園
- ウ 講師 (ア)四国大学 生活科学部
人間生活科学科 デザインコース 准教授 上野 昇 氏
(徳島聴覚支援学校，板野支援学校，ひのみね支援学校を担当)
(イ)徳島県立工業技術センター
生活科学担当 研究係長 室内 聡子 氏
(みなと高等学園を担当)
- エ 期間 令和2年11月から令和3年2月まで
- オ 場所 各特別支援学校及び徳島県工業技術センター
- カ 活動内容

(ア)徳島聴覚支援学校 (11月に実施，場所：徳島聴覚支援学校，
対象：高等部生徒6名)

「初めての気ままにVRアート」

Oculus Quest2 というVRゴーグルと Tilt Brush というバーチャル空間にペイント可能なアプリケーションを使って，空間の制限なく，想像力を働かせて，自由なテーマでバーチャル空間に光・色・点・線・形を描き，作品を制作した。また，iPadと接続することで，生徒が見ているVRの世界を外からも見ることができた。



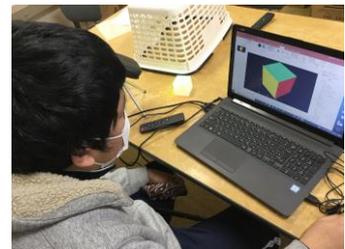
(イ)板野支援学校 (2月に3回実施, 場所:板野支援学校,
対象:高等部生徒10名)

「ペイント 3D を使った作品」制作

自分で描いた図形を立体にしたり,用意されている 3D オブジェクトを利用したりして,簡単な操作で 3D アートを楽しむことができた。今回はテーマを「雪だるま」とし,それぞれが思い思いの雪だるまを作成し,個性あふれる雪だるまが完成した。

「PowerPoint でプロジェクションマッピング」

立方体 3 面に投影されている映像を確認しながら PowerPoint でアニメーションを作り,好みのプロジェクションを作成した。



(ウ)ひのみね支援学校 (12月~1月に実施, 場所:ひのみね支援学校,
対象:小学部高等部の児童生徒)

「スポンジモンスターづくり」 小学部 3・4 組 (4名)

スポンジをちぎってくっつけたり,マジックで色をつけたりしてスポンジモンスターの形を作成した。次に,光に反応して動く装置をスポンジモンスターの中央部に取り付け,光を当てて振動させ,その動きを感じたり,友だちとスポンジモンスター同士で相撲を取らせたりした。



「万華鏡づくり」 小学部 3・4 組 (4名)

専用のキットを使い,児童がディスクを削って模様を付け,色に変化する LED ライトを箱の底から照らし,万華鏡を完成させた。TV に接続して覗いて見える世界を映し出し,みんなでその美しさを共有することができた。



「顔スタンプづくり」 小学部 8・9・10 組 (7名)

それぞれの顔写真をアプリでイラスト化し,名前を入れたスタンプを制作した。スタンプやスタンプ台は,各自で好きな色を選択した。持ち手にコルクを使用することで,軽くて感触もよくなり,押しやすくすることができた。作品や持ち物等に押し活用していく。



「手形づくり」 小学部8・9・10組（7名）

3D スキャナーで手首から先を撮影し、それぞれ手形を制作した。5分の1ほどの縮小サイズで、目で見ただけでなく、手に取って自分の手の形を確認することができた。



「クッキー型」作成 高等部1HR（3名）

顔写真から 3D プリンタでクッキー型を作った。持ち手を付けることによって、使いやすくすることができた。また、実際にこの型を使ってクッキーを焼くことができた。



「押し切りばさみ」作成 高等部1HR（3名）

カスタネットばさみに柄を付けて、押し動きで切ることができるはさみを制作した。傾斜の付いた台を一緒に貼り付けることによって、片手でも両手でも押し切ることができるよう工夫した。



「エシカルスタンプ」作成 エシカル部（2名）

「HINOMINEETHICAL」と「エシカルスタンプ」とエシカルの「エ」とひのみねの「ひ」を合わせたマークを生徒がデザインした。スタンプの持ち手は、生徒の発案で使う人が持ちやすい形を選べるように、スタンプと持ち手にそれぞれマジックテープを付け、持ち手を個々に応じて変えられるよう工夫した。持ち手は本校のびわの木を伐採した際に出た廃棄される枝を再利用した。



(エ)みなと高等学園（12月～1月に4回実施、場所：みなと高等学園及び徳島県立工業技術センター、対象：生徒7名）

「三次元CAD等を使い、幾何形体を応用した数学的思考力を鍛える玩具の制作」

STEAM教育による3D作品制作を行った。教科横断的な学びに加え、技術支援を得ることで、よりよいアート作品を制作することを目的

として取り組んだ。東京オリンピック・パラリンピック 2020 に関連した立体物を粘土で制作し、これを 3D スキャニング (Fig.1) し、三次元 CAD 上で構成 (Fig.2)、正二十面体構造物 (Fig.3) (徳島県立工業技術センター室内氏に設計依頼) に加工して、UV 硬化性樹脂に出力したものを玩具にした。

なお、並行して、数学の授業において数学や図学、幾何学などを教授することで学びの理論づけ及び定着を図った。(Fig.4)



Fig. 1



Fig. 2

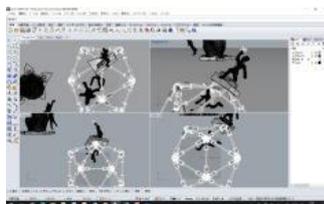


Fig. 3



Fig. 4

キ 成果と課題

(ア)VR アート

- ・VR ゴーグルをつけて作品を制作するということが初めての経験だったので、生徒の興味関心が集まる魅力的なテーマであった。
- ・短時間で Tilt Brush を使いこなすのは難しいと考えていたが、全員が基本的な操作を覚え、バーチャル空間ならではの特性をいかして、四方八方に絵を描いていた。自分の上下や奥行きに絵が描ける体験はなかなかできないので、よい経験になった。

(イ)3D プリンタ等による作品制作

- ・生徒がデザインや持ち手を考え、アイデアを出して制作ができた。
- ・スタンプの材料を触ったり、スタンプを押したりすることや、自分が書いた名前が、スタンプになるという普段できない経験をすることができた。
- ・過去に講師と 3D アートを一緒にしたことを生徒が覚えており、担当者と表情等でコミュニケーションをとることができた。
- ・光や電池を使った制作の経験をすることができた。

(ウ)プリント 3D・プロジェクションマッピング

- ・身近なソフトを使った 3D アートやプロジェクションマッピングの制作方法を学び、生徒たちのパソコン操作やデジタルアートへの関心が高まった。
- ・現在のパソコン環境で取り組めるデジタルアートの制作方法を学び、授業の可能性が広がった。

(エ)三次元 CAD

- ・専門家と連携する機会や教科横断的な学びを提供する機会を得たことで、よりアクティブで深い学びへとつなげることができたと思われる。

- ・生徒の STEAM リテラシーの向上が顕著に見られた。

児童生徒の感想

「VR アート」

- ・VR ゴーグルをつけて足下を見ると、本当に地面がなく宇宙にいるみたいで怖かった。
- ・光を描けるのが楽しい。ワクワクした。友だちの作品を見るのも楽しかった。

「プリント 3D・プロジェクションマッピング」

- ・雪だるまを作る工程で、立体的な絵ははじめてだったので、非常に勉強になった。
- ・はじめてプロジェクションマッピングを体験した。最初は難しかったが次第に楽しくなった。他にもどんなことができるのか知りたい。

「三次元 CAD」

- ・あらゆる物の形には意味や目的、思いがあることを学んだ。形の意味や理由をよく考えた上で造っていき、その形が世の中に出て美術作品やユニバーサルデザインになると思うと、とても感心した。自分が何かの製造会社に就労したら、今回学んだことを大切にしていけたらよいと思った。

ク 考察

これまでの取組において、児童生徒からは、自分がデザインした作品を制作できた喜び、新たな素材や手法へチャレンジすることによる発見や友だちと協同して制作する面白さ等の声が聞かれた。制作過程そのものを楽しむとともに、作品の完成により達成感を味わうことができたことが成果である。

今後の作品制作について、教員からは、学校では用意できない様々な素材に触れて作品作りに取り組みたい、デジタルアートの指導を継続して受けたい等の声がある。絵画や立体作品等の従来からの手法に加えて、児童生徒の希望や児童生徒が主体的に取り組み、豊かな発想を具体化していくことができる作品制作に向け、今後もデジタルアート等の専門家と連携を図り、幅広い制作活動を展開していく必要がある。

(2) 作品制作をとおした地域との交流

ア ねらい アート作品制作をとおして、地域との交流を図る。

イ 実践内容

(ア) 鴨島支援学校（8月～10月、小学校と交流・共同制作）

「ふれあい交流作品展に向けて共同作品を制作する」

両校で児童一人一人が鳥の羽を制作し、本校からは、児童の描いた

鳥の羽と一緒に、制作の様子を写真でまとめたものを届けた。

交流校の児童が、カササギをイメージした鳥の下絵を描いた模造紙に、両校の鳥の羽を貼り作品を完成させた。また、制作中の様子をまとめたDVDを届けてくれた。地域のショッピングセンターで「ふれあい交流作品展」を開催し、地域住民へ発信を行い、両校がそれぞれ同作品展へ見学に行き、感想を手紙で送った。



<成果>

- ・思い思いに作った羽が両校児童の個性や多様性を発揮するものとなった。
- ・一人一人が作った鳥の羽が、一羽の大きな鳥になった喜びを感じることができた。
- ・両校が力を合わせて作り上げた作品を地域で発表することができた。
- ・間接的ではあるが、互いの存在を感じることができた。



(イ)阿南支援学校（11月実施、中学校と交流）

各学年に1～2名ずつ加茂谷中学校の1年生の生徒たちが入って活動をした。1年生のグループ12名と加茂谷中学校生徒2名のグループが、学校祭の展示用作品を協同で制作した。絵を描いたり色を塗ったりする活動を一緒にすることで、次第に打ち解け楽しい雰囲気でも活動することができた。



<成果>

- ・互いのよいところを見つけることができた。
- ・協力して作品を作ることで、共有感を持つことができた。
- ・積極的に話すことが苦手な生徒も制作活動を介すると打ち解けやすい。

<考察>

互いに理解し合い、楽しく交流を深めることができる取組である。これからも、平面や立体を問わず、協同作品、エシカル作品など様々な作品づくりへチャレンジすることが可能である。

(3) 地域におけるアート展の開催

ア ねらい 地域での作品展示をとおして、地域に向けた発信について検討を行う。

イ 実践内容

(ア) 徳島聴覚支援学校

- ①期 間 第1回 令和2年12月7日～12月23日 幼稚部
第2回 令和2年1月12日～1月28日 小学部
第3回 令和3年1月29日～2月17日 中・高等部
- ②展示場所 キョーエイ二軒屋店 店舗入り口
- ③成 果 買い物に来た人が「素敵な作品ね」と声をかけてくれたり、「素敵な作品ばかりですね」と書いた紙を置いてくれたりした。



(イ) 国府支援学校

- ①期 間 令和3年1月15日～25日
- ②展示場所 キョーエイ国府店 出入り口
- ③成 果 買い物に来た地域の方にも、気軽に作品を見ていただくことができた。普段生徒の作品を見る機会のない方にも本校の取組を知っていただくよい機会になった。生徒から「両親と作品展を見に行き、自分の作品があって嬉しかった」「どの作品もきれいだった」等の感想が聞かれた。



(ウ) 池田支援学校美馬分校

- ①期 間 令和3年1月29日～2月9日
- ②展示場所 道の駅「みまの里」観光交流センター
- ③成 果 作品展を成功させるために、生徒一人一人が6つの作業班に分かれて活動し、アイデアを出しながら、作品展の準備を進めることができた。また、より多くの作品を見てもらうために、間隔や配置などを工夫して取り組むことができた。生徒から「4つの意識（役割を果たす、チームで協力する、楽しむ、感謝する）を持って準備することができた」、「苦手なことをみんなに教えてもらいながらできた」、「みんなで役割を決めて、自分の仕事を果たすことができた」

などの感想が聞かれた。



(エ)阿南支援学校

①期 間

令和2年12月11日～23日

②展示場所

キョーエイ上中店

③成 果

普段、あまりこの店舗を利用しない保護者が見に来てくださったり、作品を通して地域の方々に学校や生徒の様子を知っていただいたりするよい機会となった。



(オ)池田支援学校

①期 間

令和3年1月29日～2月26日

②展示場所

キョーエイ脇町ミライズ店

③成 果

美馬市では、はじめての作品展開催となったため、近隣に住む児童生徒の保護者や地域の方に、児童生徒の頑張りを見ていただくことができた。また、地域のスーパーマーケット「キョーエイ」で開催したことにより、幅広い世代の方々に作品を鑑賞してもらうことができた。



(カ)みなと高等学園

①期 間

令和3年2月15日～19日

②展示場所

キョーエイ小松島店

③成 果

展示について本校職員に調査したところ、「展示期間」においては、よかった87.5%、「展示内容」においては、よかった85.7%、「展示場所」においては、よかった66.7%

という結果であった。生徒の取組の成果を発表する場を提供できたことや、地域との連携が深まったことに大きな意義があった。生徒からは「母が展示を見て喜んでくれた」等の感想が聞かれた。



ウ 考察

近隣の商業施設でのアート展開催は、作品発表の機会として児童生徒の意欲を高めるものであり、作品をとおして地域への理解啓発を図ることができる取組となっている。「一生懸命作った作品をたくさんの人に見てもらえてうれしかった」等、自己有用感が高められる機会となった。

特に今回は、搬入や展示作業等、児童生徒の活動につなげることができた学校もあり、児童生徒が主体的に取り組むことができた活動となった。

特別支援学校の取組を発信する機会として、展示の期間・方法・児童生徒の参画等、さらに創意工夫を加え、今後も地域と関わりながら継続していくことができる取組である。

(4) 四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動における作品の展示と配布

ア ねらい 特別支援学校の児童生徒が持つ技能や、豊かな感性を生かした作品等を四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動において展示したり、お遍路さんに配布したりすることとおして、各特別支援学校の特色ある取組の推進や、児童生徒の豊かな表現力の向上を図るとともに、文化・芸術分野における障がい者の才能に対する理解と活躍の機会拡充を推進する。

イ 実施内容 四国八十八ヶ所霊場札所が近隣にある特別支援学校5校が、次のとおり実施。

学校名	活動場所	実施日	参加生徒数
板野支援学校	第三番札所 「金泉寺」	令和2年12月8日(火) 9:30~11:40	高等部8名
		令和3年1月19日(火) 9:30~11:30	高等部4名
国府支援学校	第十四番札所 「常楽寺」	令和2年10月13日(火) 10:00~11:30	高等部7名

池田支援学校 美馬分校	第八番札所 「熊谷寺」	令和2年10月8日(木) 10:00~11:00	高等部12名
阿南支援学校 ひわさ分校	第二十三番札所 「薬王寺」	令和2年10月12日(月) 13:00~14:30	小・中学部, 高等部6名
鴨島支援学校	第十一番札所 「藤井寺」	令和2年11月5日(木) 13:45~14:45	高等部2名



鴨島支援学校



池田支援学校美馬分校



板野支援学校



阿南支援学校ひわさ分校



国府支援学校

(ア)板野支援学校

牛乳パックをリサイクルした「しおり」や「はがき」、縫製の技能を生かした「香り袋」、「マスク」を展示、配布した。また、清掃の技能を生かし、境内の清掃活動も行った。



(イ)国府支援学校

牛乳パックをリサイクルし、生徒がデザインして仕上げた「しおり」や「はがき」にメッセージを加えて、お遍路さんへ配布した。



(ウ)池田支援学校美馬分校

生徒が縫製の技能を生かして製作した「マスク」を展示、配布した。また、清掃の技能を生かし、境内の清掃活動も行った。



(エ)阿南支援学校ひわさ分校

ご当地自慢のウミガメをモチーフにした「ストラップ」や牛乳パックをリサイクルして作成した「しおり」を展示、配布した。



(オ)鴨島支援学校

端材を利用して作成した「スマホスタンド」や「香り袋」等を展示、配布した。



ウ 成果と課題

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休校となったこともあり、例年よりも実施回数が減った。また、コロナ禍での実施となったことで、直接作品等を配布できない学校もあったが、お遍路さんへの呼びかけをしたり、作品を自由に取っていただくスタイルに変更したりするなどの工夫をすることで、特別支援学校の取組を県内外へ発信することができた。

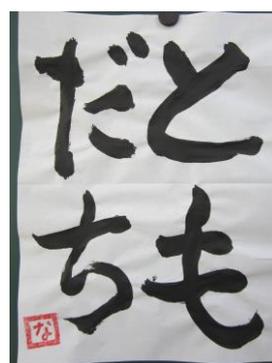
また、お遍路さんから感謝の言葉をかけていただいたり、作品についての感想をいただいたりすることで、児童生徒が達成感や成就感を感じることができた。

(5) アート展の開催

- ア ねらい 県内と四国内の特別支援学校の幼児児童生徒のアート作品によるアート展をWEB上にページを開設して開催する。児童生徒の創作意欲の向上とアクセスしてくれた人に向けた情報発信を行う。
- イ 名称 第4回とくしま特別支援学校「きらめきアート展」
- ウ 参加校 県内の特別支援学校及び分校12校（鳴門教育大学附属特別支援学校を含む）、四国内の特別支援学校及び分校8校
- エ 日程 令和3年2月17日（水）～3月24日（水）
- オ 公開会場 <https://kirameki.tokushima-ec.ed.jp/>
- カ 展示内容 共同作品、個人作品あわせて457点
（絵画、立体、手工芸、書道、エコ作品、デジタルアート、陶芸、木工作品等）
- キ アクセス数 30,585回
- ク 同時期開催 とくしま共生アートプロジェクト事業
「障がい者アーティストの卵」発掘展
（ともに徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター主催）



ケ 内容 (アート展出品作品の一部)



デジタルアート作品



きらめきアート展 in 県庁



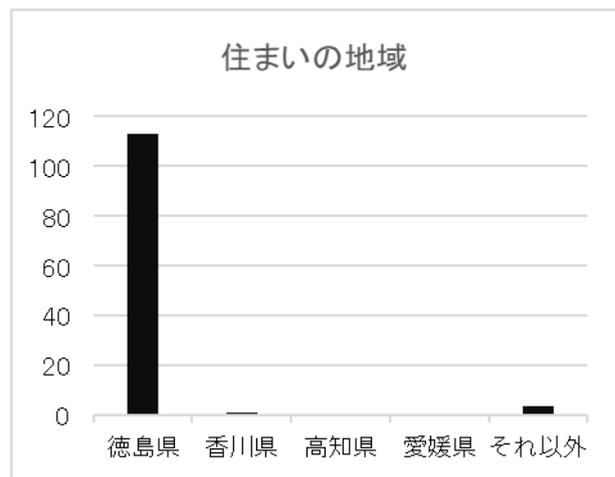
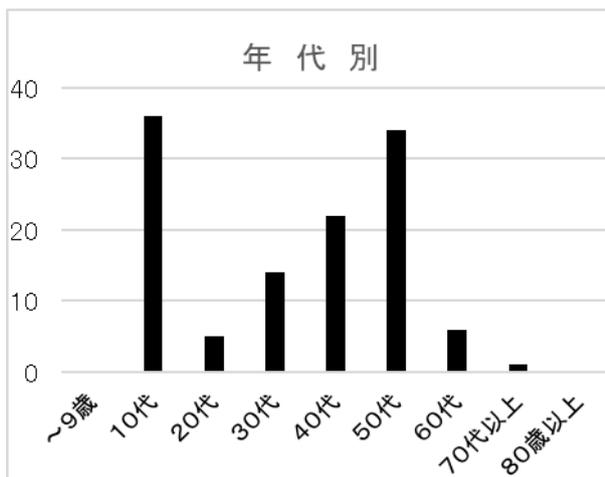
すだちくんも遊びに来てくれました

コ 閲覧者アンケート

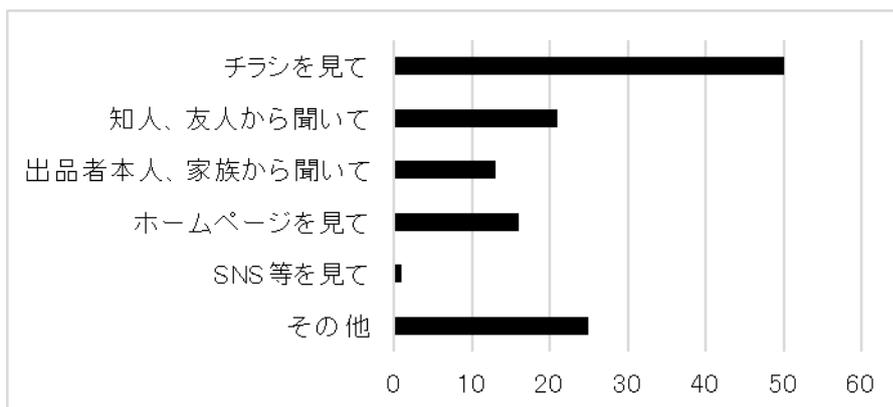
(ア) 調査概要 期間：令和3年2月17日（水）から3月24日（水）まで

(イ) 回答者数 118名

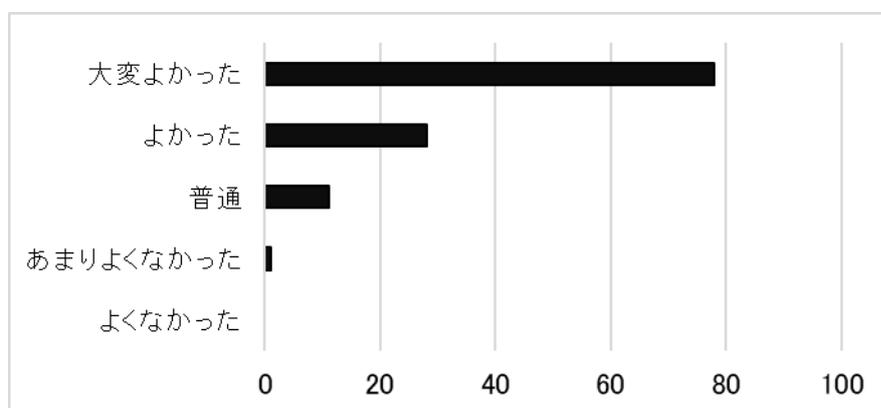
(ウ) 回答者の属性



(エ) アート展の情報入手方法



(オ) 「きらめきアート展」の感想



サ 成果と課題

(ア) 成果

昨年に続き、県内全ての特別支援学校 12 校と今年度は新たに四国内の特別支援学校 8 校が参加となった。集まった 457 点の特色あふれる作品により、WEB 上にてアート展を開催することができた。県民の方々だけでなく、四国内にも広く特別支援学校の取組を知っていただくよい機会となった。

出品いただいた県外の特別支援学校

(香川県) 香川中部養護学校, 香川東部養護学校
高松養護学校, 香川丸亀養護学校

(愛媛県) 新居浜特別支援学校

(高知県) 高知ろう学校, 山田特別支援学校田野分校
高知若草特別支援学校

(イ) 課題

特別支援学校の作品や取組を発信する機会の拡充に向けて、地域におけるアート展の活用や、実会場と WEB を併用した作品紹介の方策をさらに検討していきたい。

3 活動の成果と課題

本県の特別支援学校におけるスポーツ活動と芸術・文化活動の振興を図るため、本事業を実施した。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、令和2年度については、計画どおりに実施することができなかった。このような状況の中、実行委員会において実施時期や開催方法等について検討を行い、スポーツ活動、芸術・文化活動とも可能な範囲で取組を実施することができたことは、大きな成果である。

スポーツ活動では、オンラインを活用した新たな取組として考案した「ターゲットボッチャ」を実施することができ、コロナ禍における時間や距離の制約を超えた新しい形の交流大会を開催することができた。また、その成果を生かすことで、「とくしまスポーツ交流大会」では、他県からも参加があり、交流を深めることができた。この点については、今後のスポーツ活動において大きな可能性を感じることもできた。しかし、オンラインでのスポーツ活動については、通信機器の準備や機器操作等において技術を要するところがあり、円滑な運営をするためには、事前に活動に関わる方々と共通理解を図り、リハーサルをしておく必要があるなどの課題も見つかった。課題解決に向けた検討を行いつつ、オンラインで実施可能な競技を選定したり、開発したりしていくことも重要であると考えている。

芸術・文化活動においては、専門家の指導により、児童生徒の豊かな発想によるアプリやソフトを使った3Dアートやプロジェクションマッピング、VRアート等の新しい技術を取り入れたデジタルアート作品制作に取り組み、自由に表現する楽しさやその面白さを感じることもできた。

作品作りをとおした交流活動については、コロナ禍のため、多くの学校において計画どおり実施ができなかった。このような状況の中、作品を作っている様子を動画や写真にして見てもらったり、学校間で繰り返し作品自体を行き来させて共同作品を仕上げたりするなど、工夫を凝らした方法で交流を深めることができた。好事例を共有し、学校間及び地域との交流のさらなる拡充を図っていきたい。

さらに、令和2年度は、コロナ禍における新たな取組として、県内全ての特別支援学校と四国内の特別支援学校8校のアート作品がWEB上で一堂に会した「きらめきアート展」の開催が実現した。多数の方々にアクセスいただき、障がい者アートに触れていただく機会を創出することができた。しかし、実物の作品の良さを伝えきれない難しさもあるため、今後は、実会場とWEB会場のハイブリッド開催についても検討していきたい。

スポーツ活動、芸術・文化活動とも、コロナ禍での厳しい状況の中での取組であったが、中止とせず、開催方法や開催規模等を工夫することによってこれまでの取組を継続できたことに意味がある。各大会やイベントの参加者からの声から、取組を継続することの大切さ、児童生徒が活躍・自己表現できる機会や場の重要性を改めて考える機会となった。

2021年は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される年である。本県では、平成29年度から取り組んできたスポーツ活動、芸術・文化活動それぞれの成果を活かしつつ、集大成としてスポーツとアートが融合した大会やイベントの開催についても検討を行い、開催できるよう進めていきたい。

また、これまで培ってきた成果や整備された環境等については、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が終わった後も、障がいのある人々が生涯をとおしてスポーツ活動や芸術・文化活動を楽しむことのできるレガシーとして活用しつつ、共生社会の実現に向けた取組を推進してまいりたい。

令和2年度 スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト 2020

(全国的な祭典の実施事業)

特別支援学校「みんなの主役」きらめき事業

令和3年3月31日発行

徳島県教育委員会特別支援教育課